

「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第 85 回

『「寛容にして慈愛あり」 ～ 「心の蔵を豊かにする」 ～』

021年11月28日(日曜日)の午後『東久留米がん哲学外来 in メディカル・カフェ』（東久留米市スペース105に於いて）に赴いた。「“がんの悩みを心おきなく話したい” メディカル・カフェ 患者さんやご家族、医療者が対話する場です。」と謳われている。今回は、5組の個人面談の機会も与えられた。大変貴重な充実した時であった。2008年1月 順天堂大学で『がん哲学外来』を開設したのが原点である。そして、病院外での『東久留米がん哲学外来・カフェ』が、2008年10月にwifeとスタッフとで始まった。皆様の熱意、真摯なる姿には、ただただ感謝である。「樋野先生、今日も素晴らしい時間をありがとうございました。先生やJeanさん、そして会の皆さんにお会い出来て 今日元気なをいっぱいいただくことが出来ました。本当に心から感謝しております。先生にお会い出来る私は本当に幸せだと 今日あらためて実感しました。これからも先生の言葉の処方箋を大切に頑張って生きて行きたいと思っておりますので、どうぞ宜しくお願い致します。今日はありがとうございました。Jeanさんの手作りケーキ、主人とご馳走になりました。とっても美味しく2人で感動しております。お忙しい中、皆んなのために作っていただき本当に感謝しております。Jeanさんにもどうぞ宜しくお願いいただけましたら嬉しいです。いつもありがとうございます。」との心温まる愛情溢れるメールを頂いた。

終了後は、同じ会場で『読書会』であった。『東久留米がん哲学外来・カフェ』開始の前年2007年12月9日に、新渡戸稲造 著『武士道』、内村鑑三 著『代表的日本人』の『読書会』を始めた。今回は、『武士道』（新渡戸稲造 著、矢内原忠雄 訳）（岩波文庫）（画像）の「第6章：礼」であった。「礼は寛容にして慈愛あり、礼は妬まず、礼は誇らず、驕らず、非礼を行なわず、己れの利を求めず、憤らず、人の悪を思わず」、「泣く者と共に泣き、喜ぶ者と共に喜ぶ」などなどの「言葉の処方箋」に満ち溢れている。何回読んでも新鮮である。日々の生活、置かれた状況で、脳の引き出しに入れてある数々の「言葉」が蘇る。まさに、「良書を読み、有益な話を聞き、心の蔵を豊かにする」（新渡戸稲造）である。本当に有意義な1日であった。

武士道

新渡戸稲造著

矢内原忠雄訳



「武士道はその表
徴たる桜花と同
じく、日本の土
地に固有の花で
ある」——こう
説きおこした新

渡戸（1862 - 1933）は以下、武士道の淵源・
特質、民衆への感化を考察し、武士道がい
かにして日本の精神的土壤に開花結実した
かを説き明かす。「太平洋の懸橋」たらんと
志した人にふさわしく、その論議は常に世
界的コンテクストの中で展開される。



青 118-1
岩波文庫